

大の被曝線量は 13 mrad/min となり 3 カ月に 8 レムを超える可能性がある。これに比し防護筒の使用状況は、医師、放・技師合わせて 25.3% と意外に少ない結果であった。指紋調査では 202 名の回答者中 3 名に紋様の異常が認められた。放射線被曝の関連性と皮ふ検査の客観的判定規準について追求中である。

4. 地方病院における核医学診療の諸問題

。渡辺日出海
(黒部厚生病院・核)

人口 3 万の地方都市の一般市中病院における核医学診療が、現段階で抱える多くの問題点を、黒部厚生病院の 8 カ月間の Data より総括する。未だ一般に知名度の低い核医学診療が自立する行手には経済的要因(立地条件を含む)、他診療科の認識、核医学診療従事者の教育、研修、一般人の偏見克服など、多くの難問が立ちはだかっている。経済的要因としては、病院の診療圏、患者の吸引力、他科の充実度から、一定 level の核医学診療を行うためには当然適正規模の病院が最低条件となる。また開設時の障害として、設備が高価、法律的規制が煩瑣、独自で診療規模を維持できる可能性などの条件が存在することもこれを裏づける。一方、核医学診療従事者のおかれた現在の立場は一般市中病院においては微妙なものであり、検査依頼科の立場を脱却する(?)ためには医師、技師、看護婦の絶えざる教育、研修のほか、またこれを支える環境と理解が必要であることは言うまでもない。市中病院は高齢の医師が多く、核医学に理解の少ないことが多く、必然的に核医学診療を困難にし、かつ設備を無駄にする。したがって当面の課題として、立地条件の吟味、優秀な技師、看護婦の育成、医師の研修の機会の必要性などが内因として存在し、一方、外的には、経済的要因の克服、核医学に対する理解と知識の普及、また核医学を知る医師世代の到来が強く望まれる。

5. T_4 Radioimmunoassay の検討

。仙田 宏平 今枝 孟義 松浦 省三
(岐大・放)

T_4 RIA キット(ダイナボット RI 研究所提供)を入手する機会を得たので、正常者 77 例、甲状腺機能亢進症 23 例、同低下症 23 例、肝硬変 10 例、ネフローゼ 2 例および妊婦 10 例の計 145 例について同一血清で Res-O-Mat T_4 値、Triosorb 値とともに T_4 RIA 値を測定し、本法の臨床的意義を若干の基礎的吟味を加えて検討したところ、以下に述べるごとく結果を得た。

(1)本法は CPBA による T_4 測定法と比べて僅少量の血清で測定でき、また多数の検体を同時に測定するのに簡便である。(2)本法の標準曲線は CPBA による T_4 測定法のそれと比べて明らかに弓状の曲線を描くため、多数の標準 T_4 量の測定が必要である。(3)正常者の同一血清を 10 回測定して得た T_4 RIA 値のバラツキ率は 7.9% となり、測定精度は比較的良かった。(4) T_4 RIA 値は Res-O-Mat T_4 値との間に有意($P < 0.01$)の相関(相関係数 $r = +0.889$)を示した。(5)正常者の T_4 RIA 値は $8.4 \pm 2.4 \mu\text{g/dl}$ となり、Res-O-Mat T_4 値の $9.3 \pm 2.7 \mu\text{g/dl}$ と比べてやや低値を呈し、この傾向は甲状腺機能亢進症を除く他の症例群にも認められた。(6) T_4 RIA 値と Triosorb 値との間には、正常者、甲状腺機能亢進症および同低下症で有意($P < 0.01$)の正の相関(相関係数 $r = +0.853$)を認めた。しかし、ネフローゼや妊婦など TBG 量に変動のある症例の T_4 RIA 値は、CPBA 法による T_4 値と同様に、Triosorb 値との間に負の相関を示し、ネフローゼでは T_4 RIA 値が小さくなる反面 Triosorb 値が大きくなり、また妊婦ではその逆の傾向を認めた。

6. RIA 法による T_4 測定の臨床応用

。分校 久志 窪田 昭男 久田 欣一
(金大・核)